

第2回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテストの成果と課題

花岡 和聖*・村中 亮夫**・吉越 昭久***

I. はじめに

本稿の目的は、1) 2008年度に実施した、立命館大学歴史都市防災研究センター主催の小学生とその保護者を対象とした「安全安心マップコンテスト」の事業概要とその成果を整理すること、2) 応募者へのアンケート調査を通じて、親子でマップを作成する意義と課題を検討することである。

近年、地図を用いて、地震や洪水などの自然災害の履歴や想定範囲および犯罪や交通事故の発生地点などの「安心安全」に関する情報が自治体などによって取りまとめられ住民へと提供されるようになってきた。「ハザードマップ」や「安全安心マップ」がそれらに該当する。

さらには、自治体による情報提供ばかりでなく、住民が主体的に身近な地域の自然災害や犯罪、交通事故の危険箇所などを調査し、地図を作成する試みが各地で実施されている¹⁾。そこでは、主に学区や町内会を単位として、住民らが地図を片手に地区内を調査し、自然災害や犯罪、交通事故などの危険性のある箇所を地図に記入し、マップを作成する。このマップの作成を通じて、地区内の実態調査や住民の防災意識向上や、住民間での情報共有が期待される²⁾。

こうした安全安心マップは、災害や犯罪被害に遭う可能性の高い子供らにまず作成してもらう必要がある³⁾。ただし、子供の知覚環境⁴⁾は小学生の低・中学年では十分に発達しておらず、その空間的範囲や要素も限定される⁵⁾。また知覚環境は高齢者や障害者、子供によっても異なることが明らかにされてきた⁶⁾。そのため、災害や犯罪、事故などの安全安心に対する知覚環境も、個人特性に応じて異なるものと考えられる。そこで、子供だけでなく保護者や地域の大人と一緒にマップ作成に取り組

むことで、子供だけでは見過ごしてしまう危険箇所の確認や、子供と保護者との安全安心に関する情報共有が可能となり、安全安心マップ作成による防災・防犯意識向上の効果をより高められるものと期待できる。

II. 事業概要

1 応募資格

安全安心マップコンテストの応募資格は、(a) 京都府内に在住している小学生の個人またはグループ、(b) 京都府内の小学校に通学している小学生の個人またはグループのいずれかを満たす個人またはグループとした。マップ作成には20歳以上の大人最低1名が保護者として小学生に同伴することとした。

2 作品

マップは地域の安全安心に関連する内容であればテーマおよび地域は自由とした。またマップは原則としてA0用紙(841mm×1189mm)以内とした。ただし、表現の自由度を高めるため、冊子状の作品や複数枚の用紙で構成される作品なども受け付けた。

3 実施期間

小学生と保護者が夏休みを利用して地図作成に取り組めるように本コンテストは夏休み期間に実施することとした。2008年6月に募集要項を京都府内の全小学校に配布し、京都新聞や『GoGo土曜塾』(京都市教育委員会生涯学習部運営)、ウェブサイト(歴史都市防災研究センターHPおよびYahoo!キッズへの登録)による広報を行った。さらに近隣の小学校に訪問しコンテストの内容を説明した。その後、募集要項の配布から2008年8月12日までの事前申込受付期間に作品応募の事前受付を行った。作品の応募は、2008年8月22日から9月12日の期間に受け付けた。

4 関連機関との連携

本コンテストの実施に際して、NHK京都放送局、NPO災害から文化財を守る会、京都市教育委員会、(財)京都

* 立命館大学衣笠総合研究機構

** 立命館大学文学部

*** 立命館大学文学部

立命館大学歴史都市防災研究センター・副センター長

市景観・まちづくりセンター、京都市消防局、京都府教育委員会、京都新聞社、近畿コカ・コーラボトリング(株)、人文地理学会、立命館地理学会（五十音順）からの後援を得た。

Ⅲ. 実施結果

1 応募総数

作品の応募総数は131点であった。昨年度（18件）と比較して今年度の応募総数は大きく増加した。個人の応募が129点、グループでの応募が2点であり、大半の作品が個人での応募であった。応募者の学年別構成は、1年生が2名、2年生が3名、3年生が120名、4年生が4名、5年生が2名、6年生が2名であった。3年生が多い理由は、立命館小学校の3年生において安全安心マップの作成が夏休みの課題に指定されたためである。

2 審査方法・結果

応募作品は、2008年9月24日と29日に、文化遺産

や防災、まちづくりを専門とする8名の専門家から構成された審査委員会において厳正に審査された。審査は①文章・図表の表現、②目的・主題の明確さ、③独自性(オリジナリティ)、④全体の構成、⑤データの充足度の観点から10点満点で評価された。これらの審査結果を合計し得点の高い順に最優秀賞1点、優秀賞3点、入選3点、佳作5点を選定した（第1表）。

3 表彰式・作品展示

2008年10月19日に立命館大学歴史都市防災研究センターにて表彰式が行われ、受賞者に表彰状および副賞、センター長著書、後援先関連グッズが授与された。後援先グッズとしては、近畿コカ・コーラボトリング(株)から折り畳み自転車やタオルなどが授与された。

すべての応募作品は、立命館大学歴史都市防災研究センターの展示ルームにて10月20日から12月19日まで展示された（写真1・2）。展示期間中の来館者は123名であった。

第1表 受賞作品リスト

受賞内容	学年	応募形式	タイトル
最優秀賞	3年	個人	Barrier-Free-Bridge 車いすで安全に見に行く京の送り火
優秀賞	6年、4年、1年	グループ	東寺を守る
入選	5年	個人	原谷の安全・安心・調査マップ
入選	4年	個人	ぼくの住む町 危ない!! ひやり おっとびっくり Map
入選	4年	個人	防災マップ 消火器・消火栓の位置
佳作	3年	個人	ぼくの町の安心安全マップ
佳作	3年	個人	ぼくの学校ひとまわり安全安心マップ
佳作	4年	個人	京都市伏見区淀地区水害防災マップ
佳作	3年	個人	ぼく的生活 Map～安全な道、危険な場所～
佳作	3年	個人	お家から正雀までの道のり



写真1 センターでの展示



写真2 受賞作品

IV. 安全安心マップ作成の意義と課題

応募要項に添付して地域の安全安心やマップ作成に関するアンケート調査票を応募者の保護者に配布し、作品応募時に調査票113件を回収した（回収率86.3%）。その結果をもとに、子供と保護者が一緒に安全安心マップを作成する意義と課題を検討したい。

1 回答者属性

回答者である保護者の年齢構成は、30代が37.2%、40代が54.9%、50代が5.3%、60代が0.9%、不明が1.8%であった。回答者の性別は、男性が28.3%、女性が69.0%、不明が2.7%であった。回答者の居住地は京都市が67.3%と大部分を占め、京都市以外の市町村が12.4%、滋賀県が11.5%であった。このことから、大半が、京都市内に住む小学生とその親による応募であると考えられる。

2 安全安心に対する子供と保護者の関心

マップ作成によって、子供の安全安心に対する関心が高まったかの問いに対して、54.9%が「とても思う」、40.7%が「やや思う」、0.9%が「あまり思わない」、3.5%が不明と回答した。このことから、保護者からの視点ではあるが、マップ作成を通じて、安全安心に対する子供の関心が高まったことを確認できる。一方、保護者の関心が高まったかの問いに対して、48.7%が「とても思う」、44.2%が「やや思う」、4.4%が「どちらでもない」、2.7%が不明と回答した。したがって、子供ばかりでなく安全安心に対する保護者の関心を高めるうえでもマップの作成が有効であると考えられる。

3 子供と保護者の知覚環境の相違点

安全安心に対して子供と保護者の認識の相違について自由記述をお願いした。その結果は、第2表のように分類される。

第2表 子供と保護者との知覚環境の相違点

回 答	件数	割合
子供の未発達な知覚環境	50	44.2%
うち目線の高さに言及	9	8.0%
子供特有の知覚環境	18	15.9%
子供と保護者の知覚環境に相違はない	7	6.2%
その他	15	13.3%
無回答	24	21.2%
有効サンプル数	113	

筆者による分類、複数に分類した回答あり

まず、保護者と比較して、子供の未発達な知覚環境に関する意見が約44%を占める。以下にその例を示す。

子供は、安全だと思っている所でも、かなり交通量が多く危ない。
(50代・男性)

「不審者が多い場所」の認識があまりなかったことがわかった。「公園のトイレなど子どもだけであまり行かない方がよい」などの注意を軽く受けとめているようだった。

(30代・女性)

さらに、子供の目線の低さに起因する知覚環境の相違に言及する意見も得られた。

ガード下の坂道で大人と子供の目線で見える部分が違ったので、大人は大丈夫と思っていても、子供には急に車が出てきてハッとするまでの時間に差があるので子供の立場で気を付けないと思いました。(40代・女性)
子供と大人の視線の高さの違いにより、大人には簡単に目に入るもの（サインなど）が子どもには見えてない事を実感しました。
(40代・女性)

一方で、保護者とは異なる子供独自の知覚様式がみられたとする意見も約16%に上る。

保護者は町内会ごとの防火や防犯のとりくみにちがいがあふることを感じたが、児童の視点は、登下校時の歩きやすさ（電柱や看板、害物、車や自転車の量）が気になるようだった。
(40代・女性)

日頃、特に交通事故への注意をしていましたが、子どもと歩いてみて、子どもにはむしろ不審者に対する意識が高いことがわかりました。110番の家に限らず、どこの家にも助けを求める様いいました。
(40代・女性)

以上のように、保護者と比較して、安全安心を十分に把握できるまでに子供の知覚環境が発達していないことがうかがえる。これは、本コンテストの応募者の大半が小学校3年生であり、保護者と比較して目線が低いことや、小学校中学年までは個別の場所を自分の経験に基づいて判断するような相貌的な知覚の傾向が強⁷⁾、空間を面的な広がりとしてイメージできる前の段階にあること⁸⁾が背景にあるものと推察できる。

4 マップ作成の意義と課題

安全安心マップを作成する意義と課題について、回答者に自由記述をお願いした。その結果、マップ作成の意義として、①安全安心の再認知と②保護者と子供との情報共有に関する意見があげられた。

前者に関する回答件数は89件あり、全体の78.7%を占める。マップの作成によって、地域にある子供110番の家や避難所、危険な場所を確認でき、その空間的な理解をより深められるとする肯定的な意見が得られた。以下にその例を示す。

マップ作成のために、普段、歩かない道や路地を注意して見ることにより、危険な所、人通りの少ない所、消火器の位置など、改めて確認できるので、とても有意義だと思います。(40代・女性)

ふだん「ここは危ないよ」と親子で話しをしておりすが、やはり地図におとして視覚的に確認することが大切であると思います。(40代・男性)

次に、保護者と子供との情報共有に関する回答は30件あり、全体の約26.5%を占める。マップによって、保護者は、子供の見落としがちな危険箇所を子供と確認できたとする意見がみられた。

子供と一緒に地域地図を持ちメモをとりながら歩きました。子供の目線でみる事が出来ました。色々な話を楽しくしながら地域周辺の安全安心を考える良い機会になりました。(30代・女性)

ふだん通っている道、通学路について、再確認する事が出来た。子供の意見を改めて聞き、見直すきっかけになった。(40代・女性)

一方、マップ作成の課題に関する主な意見は、①個人のプライバシー(9件)、②情報更新(4件)、③地域での取り組み(9件)、④屋外調査および地図作成の難しさ(9件)に関するものである。

①プライバシーの問題として、自宅の周辺を調査するため子供の居住地が特定されるといった調査者の個人情報と、調査対象となる地域住民の個人情報に対する配慮が必要とする意見があった。②情報更新として、安全安心に対する意識を継続するためにはマップの情報更新が必要とする意見が挙げられた。③地域での取り組みに関

して、家庭内だけでなく、近隣や学校などのより高次のレベルでの情報共有が必要であるとする意見があげられた。④調査や地図作成の難しさとして、マップに掲載すべき情報の取捨や小学生には地図表現が難しい点が指摘された。

以上の結果から、親子での安全安心マップの作成は、子供と保護者にとって地域の安全安心を再認知する機会であり、また情報を共有する機会でもあると考えられる。とりわけ保護者は、マップの作成を通じて、子供の知覚環境の未発達な部分や独自の部分を把握し、子供に助言を与えていることがわかった。一方で、家庭でのマップ作成には、調査の内容や範囲に限界があり、保護者らは地域での取り組みや情報更新を必要としていると考えられる。ただし情報共有には、調査者と調査対象の個人情報に留意しなければならない。

V. まとめ

本稿では、2008年度に、立命館大学歴史都市防災研究センター主催で実施した「第2回安全安心マップコンテスト」の事業概要を整理し、応募者へのアンケート調査からマップ作成の意義と課題について検討した。その結果は以下のようにまとめられる。

①京都府内の小学生を対象とした、本コンテストへのマップの応募総数は131点であった。そのうち最優秀賞1点、優秀賞3点、入選3点、佳作5点が選定された。

②応募者の保護者を対象としたアンケート調査から、マップ作成によって子供と保護者の半数近くが安全安心への関心が深まったと回答した。このことから、本コンテストでのマップ作成が、安全安心に対する親子の関心を深める効果を確認できる。

③応募者へのアンケート調査からは、子供の知覚環境が未発達であるとする意見や、子供の目線の高さに起因する知覚環境の相違に言及する意見が見られた。これは、吉田⁹⁾が指摘するように、応募者の大半を占める小学生3年生は知覚環境の発達段階にあることが背景にあると考えられる。

④安全安心マップを作成する意義として、アンケート調査の自由記述から、マップの作成が、地域の安全安心の再認知や子供との情報共有の機会となったとする肯定的な評価が得られた。一方で、プライバシーへの配慮と情報更新、地域での取り組み、屋外調査と地図表現方法

がマップ作成の課題として確認できた。

今後の課題として、事業面では、コンテストの広報の充実やマップ作成の講習会の開催も必要となる。また学術面では、マップの描かれ方や掲載される要素などを分析することで、小学生や保護者の知覚環境を把握する必要がある。さらに子供の知覚方法に配慮した、より効果的な安全安心マップの作成方法の検討も必要となる。

かかる課題を克服することで、安全安心マップが、自然災害や人為的な災害に対する住民の意識を高め、被害の軽減に結び付くものと考えられる。立命館大学歴史都市防災研究センターの安全安心マップコンテストは、こうしたマップ作成のきっかけを提供し、その普及に大きく寄与するものであろう。

【付記】 本事業は立命館大学歴史都市防災研究センター主催の事業として、文部科学省学術フロンティア推進事業「文化遺産と芸術作品を自然災害から防御するための学理の構築」(代表：土岐憲三)に基づく支援を受けた。

注

- 1) たとえば、宮城県名取市本町の「防災マップ」や京都府亀岡市篠町「篠S・MAP」などの取り組みがある。
- 2) 大友充・渋谷純一・佐藤健「手作り防災マップによる地域防災力強化に関する研究」、日本建築学会東北支部研究報告集(計画系) 65、2002、201～204頁。
- 3) 小宮信夫『犯罪に強いまちづくりの理論と実践—地域安全マップの正しいつくり方—』、イマジ出版、2006、69頁。
- 4) 泉(1993)によれば、知覚環境とは人間の身体の諸器官を通して頭の中にとらえた外界のイメージを指す。ただし、知覚環境と、認知地図や心像環境、メンタル・マップなどの用語との厳密な区別はない。泉貴久「近隣空間における児童の知覚環境の特性とその発達—広島市を事例として—」、地理科学 48-1、1993、33～52頁。
- 5) 前掲4)
- 6) たとえば、①本間昭信「日常的な生活空間における視覚障害者の空間認知」、地理学評論 73-11、2000、802～816頁、②吉田和義「子どもの遊び行動と知覚環境の発達プロセス」、地理学評論 81-8、2008、671～688頁。
- 7) 前掲6)②
- 8) 寺本潔「子どもは地図をどう理解しているのか」、(村越真・若林芳樹編『GISと空間認知—進化する地図の科学—』、古今書院、2008、所収)、83～89頁。
- 9) 前掲6)②